

## □広田教授

名前というのは、案外重要だと思っています。公民館は、やはり社会教育の施設。それに地域づくり活動がプラスされた施設が市民センターです。「ふるさと未来づくり」という名前も、この事業を始めるにあたりいろいろ考えたわけですが、これには「行政に要求する事業ではなく、自分たちがやる事業だよ」という思いがこもっています。自分たちで汗をかきながら住民自ら実施していく、行政はそれをサポートしていく。そういう流れが定着していくと、いい形で回っていくと思います。

地域づくりを進めるために求められるのは人材育成。まずは小さな課題解決を、その地区内の人たちが協力して取り組むということが必要です。形式的に組織だけを作ってもダメで、課題解決の実践の積み重ねを通して、関係者一人一人の意識を変えていかなくてはなりません。そのためどうしても時間はかかってしまいますが、自分たちで実践ができる組織を作るために必要なプロセスだということころは、理解していただきたいと思います。

## ■遠藤市長

市民センターという施設を考える上で、参考にしたのが北上市です。

地元の情報がかかるような情報誌を送ったり、交流会を開催したり。さらに、地域行事に参加してもらったりと、そういう声掛けを地域の方から行って、つながりを作っておくことで、例えば市民センターを指定管理する際の事務局の人材確保の問題も、選択肢が広がると思います。

## ■遠藤市長

確かに、山根の場合は小久慈に移り住んでいる人が多くいますし、何かあれば手伝いに行ったり、連携して行事を開催したりもしています。山形と大川目でもそのような連携があります。こういった草の根的なネットワークを強化するというところでしょうか。

今後、地域コミュニティが力をつけていったら、指定管理者として施設を住民主体で運営してほしいという思いもあります。地域で運営するのは、大変な面もあるとは思いますが、メリットもあるはずですよ。

例えば、行政職員の場合は地域と相性もいい職員が来て数年で異動してしましますが、北上市のように職員の雇用も地元で選ぶという形になれば、地域づくりのノウハウをもった職員が一貫性をもって事業を展開していけると思います。

もちろん、そういった体制を作れるように、我々も時間をかけてサポートしていきたいと思っています。

## □広田教授

久慈の次のステップは、地区ごと、その地区の将来像を定めた「地域計画」を作ることだと思っています。計画を作ることで、目の前の課題だけだけでなく、ちよつと先の課題にも気づいてもらうことができます。また、計画に沿って事業を進めていく中で経験を積んでいくことで、時期がくれば地域で運営したほうが都合がいいということになると思います。北上市では20年近く時間をかけて取り組んできています。急がずじっくりと、支援を続けていくことが大切だと思います。

## □広田教授

ネットワークを、地域としてしっかりとした枠組みにしておくことが重要です。人と人の連携ではなく、何かあった際には地区として連携できる体制をつくること、地区としてお願いに行けるような仕組みを作っておく必要があると感じています。例えば、山根地区の中に事務局を担える人がいない時は、小久慈地区在住の方にお願いする。そうすれば、定住する人が減っていても地域を支えていくことができ、地域の消滅を避けることができます。このような、拡大コミュニティの整備が中山間地域の課題解決につながると思っています。

## ■遠藤市長

個人で声をかけるのと、地域として声をかけるのでは全然違いますからね。久慈市でも、北三陸久慈市ふるさと大使制度も創設して、東京や関西などのあまちゃん好きで久慈が好きという方に申し込みをいただいて、逐一情報提供を行っています。このような、外にいる応援団・地域のファンを見つけて協力をお願いしていくことで、地域の活動の幅が広がっていくはずですね。

## Chapter 4

### ■拡大コミュニティとは

#### ■遠藤市長

施設を地域で運営するという話になったとき「うちの地区では、できる人材がいらないから難しい」という声も聞かれます。こういったケースを解決する糸口はあるのでしょうか？

#### □広田教授

現在、地域に残っている人だけで考えると、どうしても人材不足になる地域もあると思います。ところが、現在は住んでいなくても、その地域にかかりのある人というのが地域外にいたりしないでしょうか。こういった、地域住民に加えて地域出身者や地域と交流のあるファンなどを含めた地域コミュニティを、私は「拡大コミュニティ」と呼んでいます。これらの人材の活用を考えてみてはどうでしょうか。

ただし、現状ではそういった人たちと地域が直接つながっている訳ではありません。そういった人たちと常に連絡が取れるような仕組みを作っておく必要があると思っています。例えば、年に一回でも二回でも、

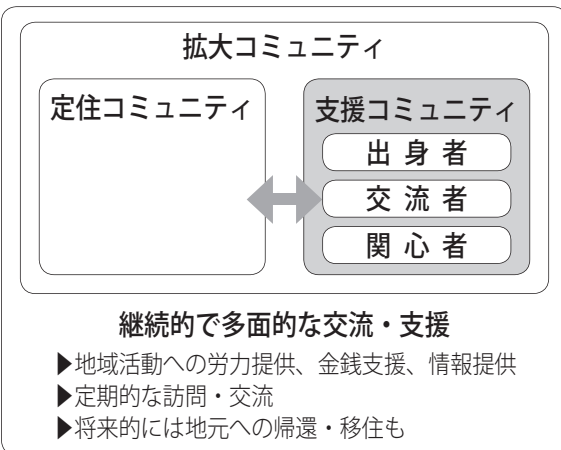
#### □広田教授

そして、こういった活動を続けていくと、不思議とその地域に帰ろうかという人も出てくるものです。交流や地域活動を活発にやっている地域ほど、若者は残りますし、外からも入ってきます。地域の雰囲気の魅力を感じたり、自分の役割があるという部分に生きがいを感じる人もいます。

#### ■遠藤市長

そういった可能性を広げていくためにも、まずは動いていかなければなりませんね。

東日本大震災・台風10号と大きな被害を受けてきましたが、久慈に住んでいる人たちは一生懸命な人が多く、人と人とのつながりも強いと思っています。また、三陸沿岸道路の開通などによる経済発展の可能性も秘めていると感じています。これに加えて、自分が住んでいる地域の課題解決に参加しようという機運が高まれば、さらに魅力あるまちに



山形町荷軽部のバッテリー村。交流のある大学の学生や卒業生らが支援組織「バッテリーネットワーク」を立ち上げてイベント開催などを支援するなど、拡大コミュニティを形成している。

なっていくと思います。みんなで地域づくりを進めて「みんなが住んでいてよかったと思える場所」を作り上げていくこと。それが「子どもたちに誇れる笑顔あふれるまち」にながっていくはずですよ。久慈ならそれができる、そう信じてます。



引用：広田純一、「拡大コミュニティの仕組み」。人口減少まっぴらなし！：～だから地域づくり～。久慈市、2016-12-17